

(Ⅳ－１)

新幹線通勤者の類型化とその特質 に関する研究

群馬大学大学院 学生会員 川崎 徹
群馬大学工学部 正会員 青島縮次郎
群馬大学工学部 正会員 磯部 友彦

１．研究の背景と目的

近年、高速交通網の発達によって通勤圏の広域化が進んでいると言われている。この中には、地方遠隔地から新幹線を利用して都心部従業地へ通勤を行うといったような動きも現われている。本研究ではここ数年間に急増しつつある新幹線通勤の実態について、高崎駅からの上越新幹線利用者を事例に調査を行い、その類型化を試みるとともに、新幹線通勤の選択要因分析を行ってその特質を明らかにする。そして併せて行った在来線通勤者に対する調査から、新幹線への転換可能性を探る。最後に、今後の高崎駅周辺の地域計画及び交通計画における課題について明らかにすることを目的としている。

２．調査・研究フレーム

(１) 調査

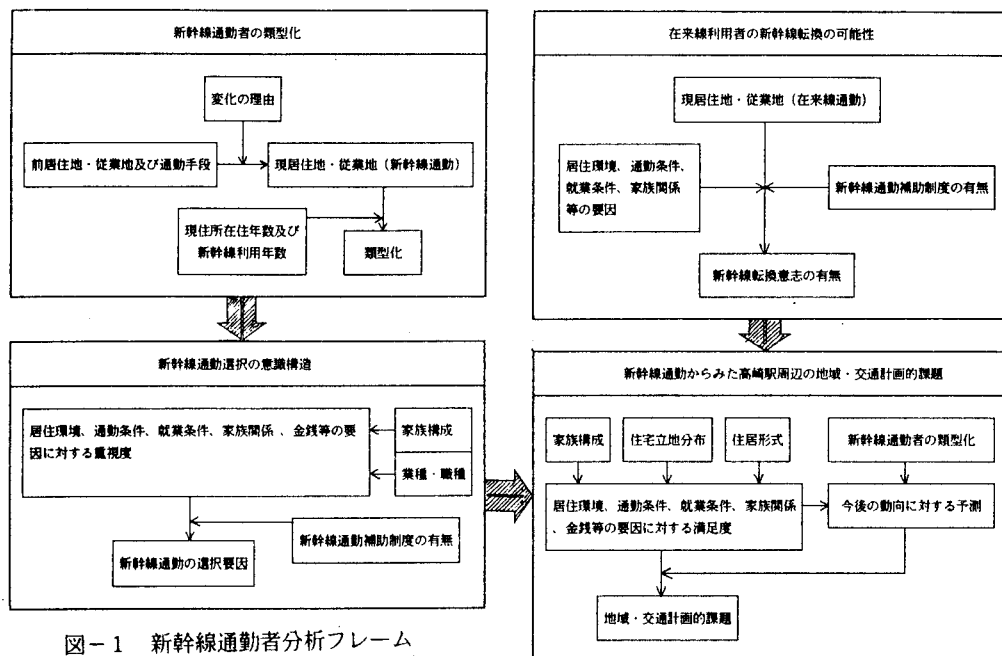
平成２年の１月と１２月の２回にわたってアンケート調査を行い、表－１のような結果を得た。調査は、いずれもＪＲ高崎駅から上越新幹線、高崎線を利用して東京方面に通勤する人を対象とし、高崎駅構内においてアンケート票を配布、郵送回収とした。

(２) 研究フレーム

本研究の分析フレームを以下に示す。

表－１ 新幹線、在来線アンケート配布回収結果

		配布日時	配布数	回収数	回収率
予備調査	新幹線	平2年1月26日(木)	677枚	309枚	45.4%
		平2年12月18日(火)	844枚	419枚	49.6%
		平2年12月18日(火)	499枚	156枚	31.3%



図－１ 新幹線通勤者分析フレーム

3. 予備調査に見られる新幹線通勤の特質

(1) 新幹線通勤者の分類

図-2は新幹線利用年数と現住所在住年数の関係を見たものである。これにより新幹線通勤がここ1、2年急速に増加してきた現象であることがわかる。ここで在住年数と利用年数に着目し、タイプⅠ（在住年数>利用年数）、タイプⅡ（在住年数=利用年数）、タイプⅢ（在住年数<利用年数）の3タイプに分類し、以下の分析を進めることとする。

(2) 前住所分布から見た特性

図-3はタイプ別前住所分布を見たものである。タイプⅠ、Ⅲを見ると前住所が群馬県である人が大半であるのに対し（以下、Ⅰ・Ⅲタイプとする）、タイプⅡでは対照的に首都圏3県（東京、神奈川、千葉）が多くを占める。図-4はタイプ別勤務先分布である。つまり、タイプⅠ・Ⅲは従来より群馬県内に在住して首都圏へ新幹線通勤を始めた人々であり、タイプⅡは首都圏より新幹線通勤を前提として転居してきた人々が大半であると言える。

(3) タイプ別世帯属性

図-5から見るとタイプⅡには相対的に、子供のいる成長期の世帯が多いことがわかる。

(4) 交通特性

図-6より、高崎駅までの端末代表交通手段はタイプに関わりなくいずれも5割前後が自動車に頼っていることがわかる。

4. まとめ

3章では、予備調査から得られたデータをもとに新幹線通勤者の分類を行い、タイプ別の特性を明らかにした。これに続く新幹線利用者の類型化、新幹線通勤の選択要因、在来線利用者の新幹線への転換意志の有無等に関する分析結果は当日発表する。

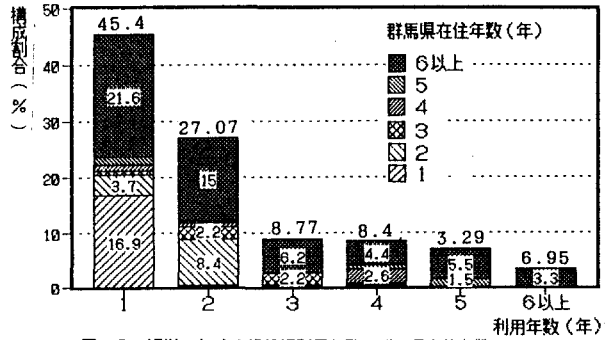


図-2 通勤における新幹線利用年数と群馬県在住年数

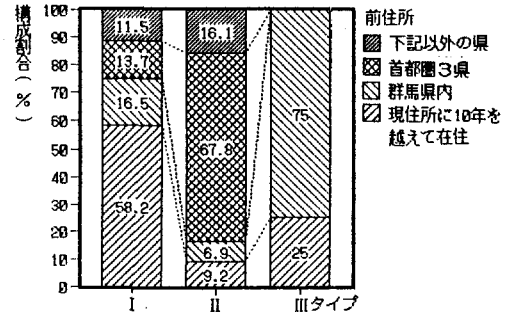


図-3 タイプ別前住所分布

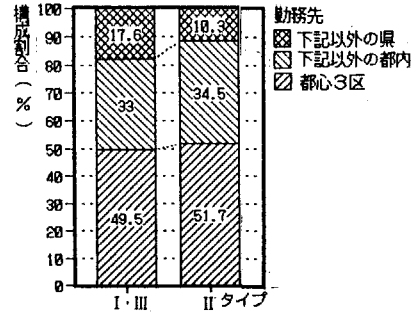


図-4 タイプ別勤務先分布

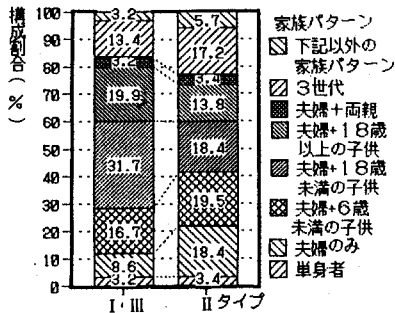


図-5 タイプ別家族パターン

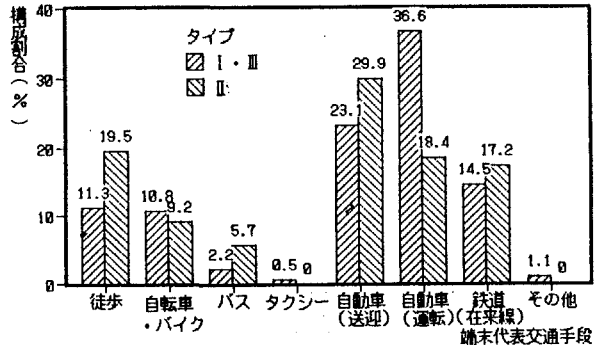


図-6 タイプ別高崎駅側端末代表交通手段